

論文の内容の要旨

論文題目 近世日本における楠正成伝説の出現と展開
— 英雄伝説の受容と変貌をめぐる基礎的研究 —
氏 名 李 忠 浩

楠正成は、「七生滅賊」の誓いを立てた忠臣として戦前・戦中に熱烈に顕彰され、現在では逆に戦時下の国民動員の象徴ともいうべき存在となっているが、前近代においては忠臣・知略家のイメージに留まらず、さまざまな文芸ジャンルに多様な正成像が存在し、多くの日本人がその生きざまに共感していた。本論文では、近世文学における正成伝説を題材にした作品を取り上げ、正成像の多様さと豊富なバリエーションを紹介し、その実体と本質を探る。

まず、序章では『太平記』の正成像の特徴を正成の出自、智将としての活躍、そして、「湊川の戦い」での最期の場面から把握し、正成像の淵源に忠臣とアウトローという二面性が孕んでいる矛盾を指摘した。楠正成は後醍醐天皇の霊夢により初めて登場し、忠臣・智略家として活躍し、智仁勇兼備の名将として顕彰されるが、その一方で正成の出自をめぐる問題も以降の正成伝説の受容に大きな影響を及ぼすことになる。本論では、このような正成像の特徴を基にして展開される正成伝説の受容様相を検討してみた。

第一章「太平記読みと正成伝説 — 『理尽鈔』の文学性」では、『理尽鈔』など太平記評判が正成伝説の伝播に及ぼした影響を検討してみたが、近世初期の『太平記』受容を主導した『理尽鈔』が創りだした新たなエピソードや人物が、以降の近世文学における正成伝説の展開にも多大な影響を及ぼしていたことが分かった。

第一節『理尽鈔』と近世前期の太平記読み」では『理尽鈔』をはじめ近世初期の「太平記読み」の成立と展開を、文学作品に描かれている太平記読みの特徴とともに考察した。

近世前期には太平記読みが舌耕文芸の一種として定着するとともに、多くの専門者が出現することになり、軍談の主流を成したが、その実像は武士階級から脱落した浪人が多くて、低い社会的階層に位置する芸人のようなものであった。

第二節『理尽鈔』が創りだした正成の周辺人物』では、『理尽鈔』が創りだした正成像の造形に関わる人物たち、すなわち「泣男」杉本佐兵衛に注目し、周辺人物の活躍が正成伝説に豊富な物語性を与えていく過程を考察した。近世文学における「泣男」譚は、戦乱の中で一種の出世を成し遂げた「泣男」を周囲の人々が妬み、「泣芸」を認めないことから物語が展開し、「泣男」の登用は正成の人材登用術の妙を強調するとともに、武士の範疇から離れていた低い身分から、戦乱の下剋上の気風の中で天皇の最側近まで登用された正成の立身出世の物語にも戦乱という非常時における人材登用という面に関わっていく。そして、これは序章で言及した正成のイメージの二面性にも関わっていると言える。

第二章の第一節「謡曲・古浄瑠璃・土佐浄瑠璃における『理尽鈔』の受容」では、近世初期の謡曲・土佐浄瑠璃・古浄瑠璃作品が取り上げた正成伝説の題材の考察を通して、当時の民衆に流行した謡曲の正成伝説のエピソードが『理尽鈔』から多数受容されていたことが把握できた。『太平記』に取材した謡曲には楠正成に題材を取ったものが多く、その中でも特に恩地左近太郎や「泣男」杉本佐兵衛のような『理尽鈔』だけに登場する人物が登場する曲が多いことが確認できた。

また、『太平記』を題材にした浄瑠璃は古くから語られており、太平記講釈の好んで取り上げた場面である湊川の合戦を描いた土佐浄瑠璃「楠湊川合戦」の場合は『太平記』の中から特定の人物を選び出して脚色しているが、和田・恩地、竹童丸などの異伝は『理尽鈔』によるものであり、全段に渡って『理尽鈔』の「評伝」の記事を引用していることがわかった。一方、太平記ものの古浄瑠璃「楠軍記」の場合は、『太平記』と『理尽鈔』の内容を適切に混ぜ合わせながらストーリーを展開しているのである。この考察から先行研究において土佐浄瑠璃「楠湊川合戦」における作者の創作と見なされてきた部分が、『理尽鈔』からの影響を受けたものであるということが明確になり、古浄瑠璃「楠軍記」との影響関係も再考の余地があることが分かった。

第二節『理尽鈔』の「評」と「伝」が創り出す新たな物語』では、正成伝説の展開において、『理尽鈔』の「評」と「伝」の記事によって生み出された異伝の一端を解明し、それによって新しく創り出された正成伝説の生成が持つ意義を考察した。正成の舎弟楠正季の人物像はもともと曖昧な点が多いことから、『理尽鈔』はそれを利用して正季と継母の異伝を創り出している。浮世草子『春駒大内腔』は『理尽鈔』の正季と継母についての記事に基づき、「忠臣」正成の文脈からは逸脱した楠一族の姿が描かれている。このことから、近世の俗文芸の展開においては、「忠臣」正成の顕彰という文脈から離れた楠家の物語が息づく余地が存在していたことがうかがえ、そこには『理尽鈔』の「評伝」の箇所が伝える異伝・異説が様々な物語の題材として大きな影響力が反映されていると言える。

第三章「世界」としての『太平記』と「忠義」をめぐる正成伝説の二面性」においては、『太平記』を「世界」としている作品群を取り上げ、正成伝説における「忠」のイメージが近世文学の中にはどのように解釈され溶け込んでいくのかを検討した。人気があった正成のエピソードが謡曲や浄瑠璃などで素材になり、また通俗軍書においては正成の伝記が新たに作り出されるなど正成伝説がますます拡充していく中で、『太平記』を「世界」としている作品群において正成の「忠義」と「智略」の物語は、当時の人々の姿に投影されてその性質を変化させていく。

第一節「近世期における「正成の妻」像の変容」では、正成の妻が活躍する「女楠物」における正成の妻のイメージとその活躍についての考察を通して、正成単独ではなく一族の物語として正成伝説が展開していく一面やその意義を検討した。『理尽鈔』においては重要視されなかった正成の妻の役割は、仮名草子『本朝女鑑』においては息子を訓戒する「楠帯刀母」として描かれ、教訓書に登場することになる。一方、時代浄瑠璃においては『吉野都』では「大力女」という逞しい女性のイメージが付与されたり、『南北軍問答』では女色に溺れる正行や泣男などの新しい構想が見られるものの、『太平記』における良妻賢母としての「正成の妻」の性質に変わりはない。しかし、『吉野都女楠』においては「女楠」という詞に結び付くことになり、これは歌舞伎にも受け継がれ、女形のエロチックな演出、面白おかしい語りなどにより、観客にパロディとして正成の妻のイメージを提供して笑いを取っていた。

第二節「太鼓持になった正成 — 擬似世界における「忠」」では、時代物浮世草子において遊廓の太鼓持ちとして登場し、当世化された正成の忠誠について考察した。『けいせい盃軍談』や『契情太平記』では、正成は活躍の舞台を遊廓に移して機転の働く太鼓持ちとして登場する。このように当時の世態に正成を取り込む中で、楠正成を好色というかけ離れた世界に登場させつつ、本来天皇のために最後まで尽くした正成の智略と忠義を、太鼓持の智略と忠義にパロディー化した形に作り変える。正成は天皇の最側近として、「智略家」や「忠臣」という元来持っていたイメージをそのまま保ちながらも、大衆により親しみやすい人物としてその姿を変容させることになる。

第四章「近世発生の実録と正成伝説の結合—主家復興の物語へ転換」では、正成伝説と実録との緋い交ぜを考察して、正成伝説が近世文学の中で定着していく過程の中で主家復興の物語として変貌していくことを究明した。

第一節「正成伝説と宮城野信夫譚」では、近世文学における正成伝説と実録との関わりの一例として、宮城野信夫の敵討譚と正成伝説が緋い交ぜになった作品の一部を取り上げながら、その特色を検討した。江戸期における正成伝説は強い生命力をもった物語の一素材であり、それは周辺の実録・巷談などの多様な物語と融合して成長していくことになる。正成伝説の場合、その拡散の推進力が衰えてきた時、新しい原動力として結合したのが慶安太平記物や白石敵討物という実録種であった。江戸期において忠孝の象徴として採り上

げられてきた正成伝説は、宮城野信夫の敵討譚と結合することによって、その描くところの主従関係を中心とした絶対的な忠孝のイメージも、より現実的なリアリズムを持つ忠孝のイメージに変貌していた。すなわち、時代と空間、登場人物が異なる二つの物語を混ぜ合わせて新しい想像のストーリーとして作り上げられたことによって、正成伝説は大衆の支持を集めるために必要な社会的リアリズムを獲得し、より堅固な生命力を持つ物語として成立していったと言える。

第二節「正成伝説と四谷怪談」では、鶴屋南北作の『東海道四谷怪談』と正成伝説を縷い交ぜにした山月庵主人作の『屏風怨霊四谷怪談』を取り上げ、四谷怪談の伝説と楠家の遺臣たちの物語が融合する過程を考察した。『屏風怨霊四谷怪談』では正成の子孫である楠正元を中心にストーリーが展開するが、これは曲亭馬琴著『松染情史秋七草』からの影響を受けており、『東海道四谷怪談』という人気作に基づきながら、そこに楠家の外伝として物語を展開するにあたって、『理尽鈔』や『松染情史秋七草』から取材した楠家遺臣たちの物語が合体していた。すなわち、歴史的な世界と歌舞伎の『東海道四谷怪談』の世界を結びつけることによって、正成と正行という従来の正成伝説の主人公とは別に新たな人物たちがクローズアップされ、正成父子の忠臣や智略家という面に焦点を合わせて展開した初期読本の正成伝説に、楠家遺臣たちの南朝復興の武勇伝としての新たな展開と流れがもたらされたのである。

終章「近代における正成伝説の変容 — 尊王攘夷のシンボルから国民英雄へ」では、『日本外史』における俗文芸の利用と、それによって大衆に受け入れやすい平易な漢文文章で書かれていたことから、『日本外史』の正成伝説が天皇制教育の教科書にまで受け継がれていたことを検討した。また、『文明論之概略』における『日本外史』に対する痛烈な批判を通して、福沢諭吉が尊皇論者の正成顕彰の動きを牽制し楠正成を低評価したのは、文明開化という時勢の変革に即して、尊皇論者たちの正成顕彰が文明の進歩を妨げるものと判断していたからであると把握できた。

最後には福沢諭吉の『学問のすゝめ』によって引き起こされた「楠公権助論」をはじめ、前近代における「正成の死」をめぐる論争の考察を通して、楠正成が「忠孝の模範」である一方、「国民動員の象徴」という両側面を持つようになった経緯を明らかにした。福沢諭吉は前近代的な忠誠が近代国家においては非合理的な概念であることを主張する「赤穂不義士論」や「楠公権助論」を巻き起こしており、福沢を批判する人々は福沢が楠正成を意図的に「権助」扱いしていると強く反発する。これに対して福沢は「学問のすゝめの評」という弁明の文を新聞に寄稿し、「楠公権助論」の論争は漸く沈静化するが、福沢は心底では一貫して尊皇論者の国体論を批判しているのである。ただし、実際に福沢が主眼を置いているのは「正成の死」の意義の解釈というよりは、「時勢の変革」における日本の国体の概念のあり方であり、事態の推移を検討するとこの騒動は忠義の是非をめぐる論争というよりも、共和制の導入を訴えて天皇を中心とした国体を動揺させる福沢への反発が中心と

なっていた。すなわち、本件で楠正成が取り沙汰されることとなった理由は、正成を軽視する福沢の姿勢が、ひいては天皇を軽視する福沢の思想を体現したものとして読者に受け止められたことにあると考えられ、これは一面では当時いかに正成の忠義と天皇という存在が一体のものとして捉えられていたのかを象徴的に示す事態であったとも言える。

以上述べてきたように、近代以前の正成像は、国家に対する忠臣という絶対的なイメージには留まらない重層性を備えており、前近代の人々によって、それぞれのジャンルや立場により正成伝説も取捨選択され、時に正成の智略家としての一面が強調され、また時に忠臣としての一面が強調される。こうした正成受容の流れの中、いったん近代期に入ると国家意識の芽生えとともに「忠孝」の名のもとに取捨選択されていくことによって、国家の英雄としての正成像だけに光が当てられることになったのである。このように戦前までは帝国日本を支える精神的な象徴として「正成＝英雄」という図式が確立していた。しかし、戦後には正成は軍国主義日本の残骸として「正成＝皇国の亡霊」という形で歴史の表舞台から退けられることになる。このように、近代以降の正成に対する評価は両極端に変化しているが、現在でも、楠正成という人物の評価をめぐっては一通りでは定まらない複雑な背景が絡み合っている。